



埼玉県マスコット「コバトン」

平成27年産(26年播種)

麦類の作柄概況



平成27年7月
埼玉県農業技術研究センター 高度利用・生産性向上研究担当

1 気象概況

(1) 気温

11月から2月までは12月が低温であった他は、平年並から高温に推移した。3月以降は4月上旬など一時期を除いて高く、特に5月は平年に比べ3℃とかなり高くなった。

(2) 降水量

11月～4月までは平年並で、5月はかなり少なく、6月はかなり多かった。11月から6月までの降水量は平年の95%であった。

(3) 日照時間

11月と4月は平年より少なかったが、他は平年並から多く、特に5月は平年の140%と多かった。11月から6月までの日照時間は平年の105%であった。

(4) 熊谷地方気象台の観測記録

		11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
平均気温 ℃	本年	12.4	5.3	4.7	4.9	9.6	14.2	21.2	22.4
	平年	11.2	6.3	4.0	4.7	7.9	13.6	18.2	21.7
	平年差	1.2	-1.0	0.7	0.2	1.7	0.6	3.0	0.7
		高い	低い	高い	平年並	かなり高い	平年並	かなり高い	高い
降水量 mm	本年	60.5	19.0	33.0	26.5	53.5	81.5	37.0	240.5
	平年	59.0	31.0	32.6	34.6	70.5	92.9	111.8	145.4
	平年比	103%	61%	101%	77%	76%	88%	33%	165%
		平年並	平年並	平年並	平年並	平年並	平年並	かなり少ない	かなり多い
日照時間 h	本年	152.2	202.1	211.5	195.1	217.6	162.6	254.8	152.5
	平年	169.9	203.2	210.6	192.2	196.0	190.2	182.0	125.5
	平年比	90%	99%	100%	102%	111%	85%	140%	122%
		少ない	平年並	平年並	平年並	多い	少ない	かなり多い	多い

*熊谷地方気象台「埼玉県の気象・地震概況」より

(5) 特徴的な気象と麦類への影響

特徴的な気象	麦類への影響
• 12月の低温、少雨	• 麦の生育遅延、1 2月播種ほ場の出芽遅延
• 2月後半から3月の高温	• 麦の分けつの促進 • 麦の莖立期の早まり
• 4月前半の低温、寡照	• 大麦の登熟の遅延
• 4月後半以降の高温、多照	• 登熟の促進 • 一部ほ場の枯れ熟れ

2. 作柄概況

(1) 農技研 生育相調査結果

前年産から「農林 61 号」を「さとのそら」に切り替えた。「さとのそら」の平年値は過去 4 か年の平均であるが、平成 23～25 年産の 3 か年は本年と耕種概要が異なるため、参考平年値とした。

ア 小麦（さとのそら）

出芽、苗立は良好であった。

播種時から 1 月までは概ね平年並に推移した。2 月後半以降、高温により、分けつは旺盛となり、草丈も高く推移していたが、莖立期以降、弱小莖の夭折が急速に進み、穂数は参考平年値を下回った。莖立期は参考平年値より 2 日早まった。

出穂期は参考平年値より 2 日早まった。

登熟は著しい高温、多照により急速に進み、成熟期は参考平年値より 9 日早まった。稈長がやや長く、成熟期にはなびき程度の倒伏が発生した。

穂数が参考平年値より少なく、収量は、参考平年値比 93 であった。ただし、精子実重で 625kg/10a 得られており、一昨年の「農林 61 号」の平年収量（509kg/10a）比では 123 と多収である。

外観品質は硝子粒が混入し、やや劣った。

イ 大麦（彩の星）

出芽、苗立は良好であった。

小麦同様、播種時から 1 月までは概ね平年並に推移していたが、2 月後半以降、草丈、莖数とも平年を上回って推移した。莖立期は低温により遅延した一昨年、昨年に比べると大幅に早まり、平年より 13 日早かった。莖立後、弱小莖の夭折が進んだが、穂数は平年よりかなり多く確保された。

出穂期は平年より 5 日早かった。

登熟は 4 月前半の低温、寡照により、当初遅延気味であったが、その後の高温、多照により急速に進み、やや枯れ熟れ症状を呈し、成熟期は平年より 3 日早まった。長稈、多穂のため収穫時には倒伏程度 2.5 程度の倒伏が発生した。

収量は有効穂数が非常に多く、1穂粒数、千粒重は低下したものの、平年比108の多収であった。多穂と枯れ熟れのため整粒歩合の低下が懸念されたが、若干低下したものの、整粒重も平年比105の多収であった。

外観品質は概ね平年並に良好であった。

(2) 県内全般

播種作業は11月下旬の降雨により遅れたほ場も見られたが、概ね順調に進んだ。適期播種されたほ場では出芽、苗立ちは概ね順調であったが、遅れたり、播種深が深いほ場では、12月の低温により出芽が1月になったほ場も見られた。

生育は所内同様、播種～2月頃までは概ね平年並に推移したが、2月以降、やや過繁茂気味の生育となった。莖立期も低温で遅かった昨年、一昨年に比べると大幅に早まった。

小麦の出穂期は平年並から2～3日、大麦は3～7日程度早かった。

登熟は、小麦では高温、多照により急速に進み、成熟期は平年より7～10日程度早まった。大麦の登熟は4月上旬の不良気象によりやや遅延気味であったが、その後の好天により早まり、成熟期は3～5日程度早まった。いずれも湿害を受けたり、地力が低いと思われるほ場では枯れ熟れ症状が散見された。また、一部の大麦では止葉の黄化が見られた。

収量は、小麦、大麦とも穂数を多く確保したことから、1穂粒数、千粒重がやや低下したものの、概ね前年並と思われる。このため、前年同様、農林水産省の作況調査では平均収量（原則として直近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値）を上回ることが予想される。

表1 耕種概要（農技研 生育相調査）

播種様式	条間 (cm)	麦種	品種	播種期(月日)		播種量 (kg/10a)	施肥量(N:kg/10a)	
				本年	平年		元肥	追肥
ドリル播	30	小麦	さとのそら	11.11	11.9	5.9	6	4
		二条大麦	彩の星	11.11	11.9	6.0	7	2

注) 1.さとのそら平年値は、過去4年間の平均値、ただしH22~24は播種量8kg/10a。彩の星平年値は過去3年間の平
2.追肥時期 さとのそら:出穂14日前、彩の星:茎立期

表2 生育調査（農技研 生育相調査）

品種		出芽期 (月日)	苗立数 (本/m ²)	苗立率 (%)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	成熟期調査			倒伏 程度
							稈長	穂長	穂数	
							(cm)	(cm)	(本/m ²)	
さとのそら	本年	11.23	140	88	4.15	5.30	89.6	8.5	613	0.5
	平年	(11/20)	—	—	(4.17)	(6.8)	(85.0)	(8.4)	(797)	0
	平年比(差)	(3)	—	—	(-2)	(-9)	(105)	(101)	(77)	—
彩の星	本年	11.23	123	100	4.2	5.18	101.8	5.9	1013	2.5
	平年	11.20	123	93	4.6	5.21	88.2	5.9	759	0.8
	平年比(差)	3	100	-5	-4	-3	115	100	133	—

注) 1.「さとのそら」の平年値は過去4力年の平均であるが、H22~24は本年と耕種概要が異なる(10a当たり
播種量8kg、基肥8kgN、茎立期追肥2kgN)ため、平年比(差)は参考値とし、カッコ内に記した。以下同様。
2.倒伏程度は0~5の6段階評価

表3 収量及び収量構成要素（農技研 生育相調査）

品種		藁重	精子 実重	整粒重	有効 穂数	1穂 粒数	m ² 当 粒数	千粒重	1リットル重	整粒 歩合
		(kg/10a)	(kg/10a)	(kg/10a)	(本/m ²)	(粒)	(千粒)	(g)	(g)	(%)
さとのそら	本年	613	625	661	685	24.0	16.4	40.7	855	99.8
	平年	(688)	(702)	(713)	(783)	(24.9)	(19.2)	(39.4)	(827)	(99.8)
	平年比(差)	(89)	(89)	(93)	(87)	(96)	(85)	(103)	(103)	(0.0)
彩の星	本年	—	716	602	1004	19.4	19.5	41.3	734	84.2
	平年	607	663	571	725	21.7	15.8	47.8	676	86.1
	平年比(差)	—	108	105	138	89	123	86	109	-1.9

注) 1.精子実重は風選により屑麦を除いた重量、整粒重は篩選(小麦2.0mm、ビール大麦2.5mm)後の重量。
2.整粒歩合は、篩選(小麦2.0mm、ビール大麦2.5mm)による。
3.精子実重、整粒重、千粒重、1リットル重は水分換算値(小麦12.5%、大麦13%)。

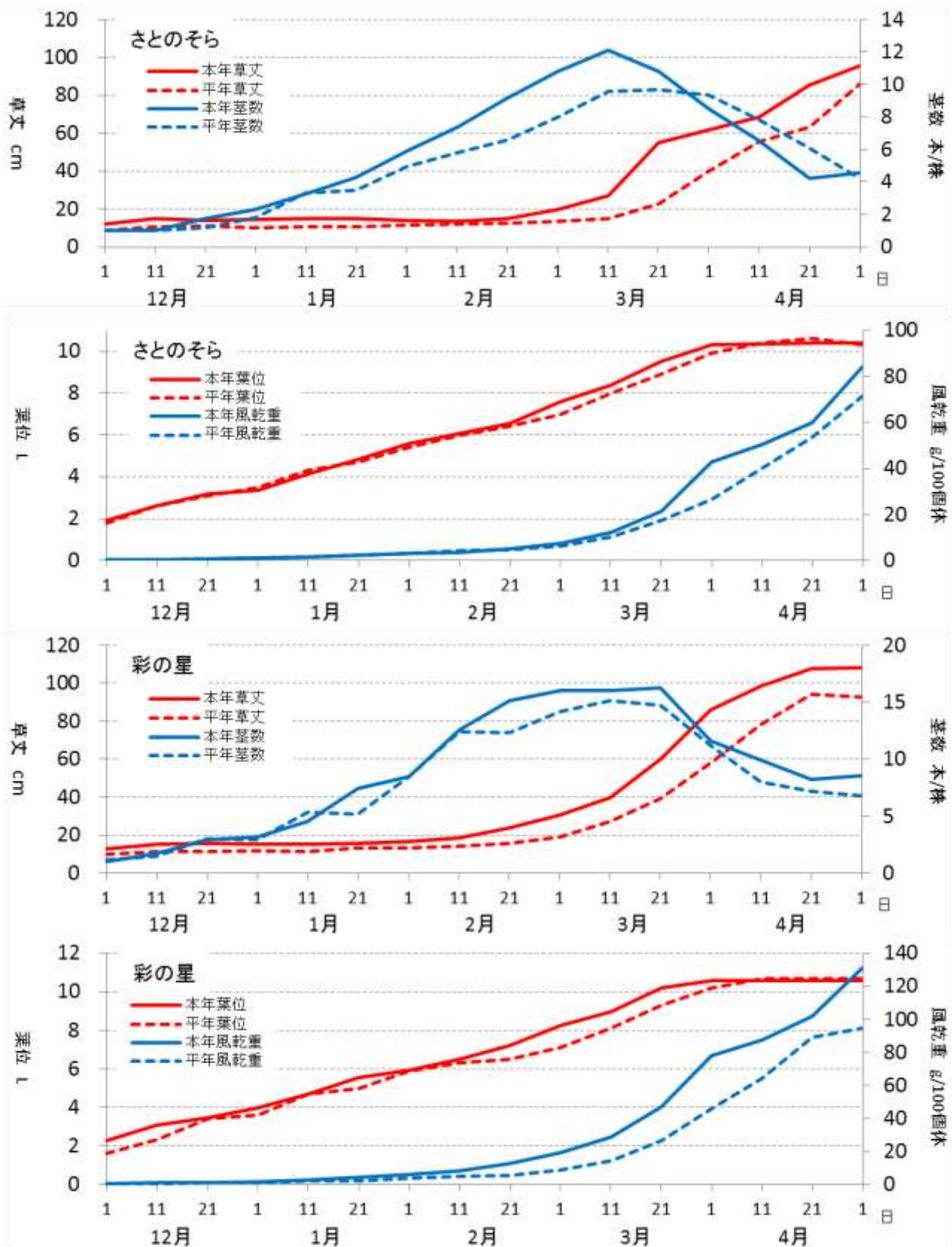
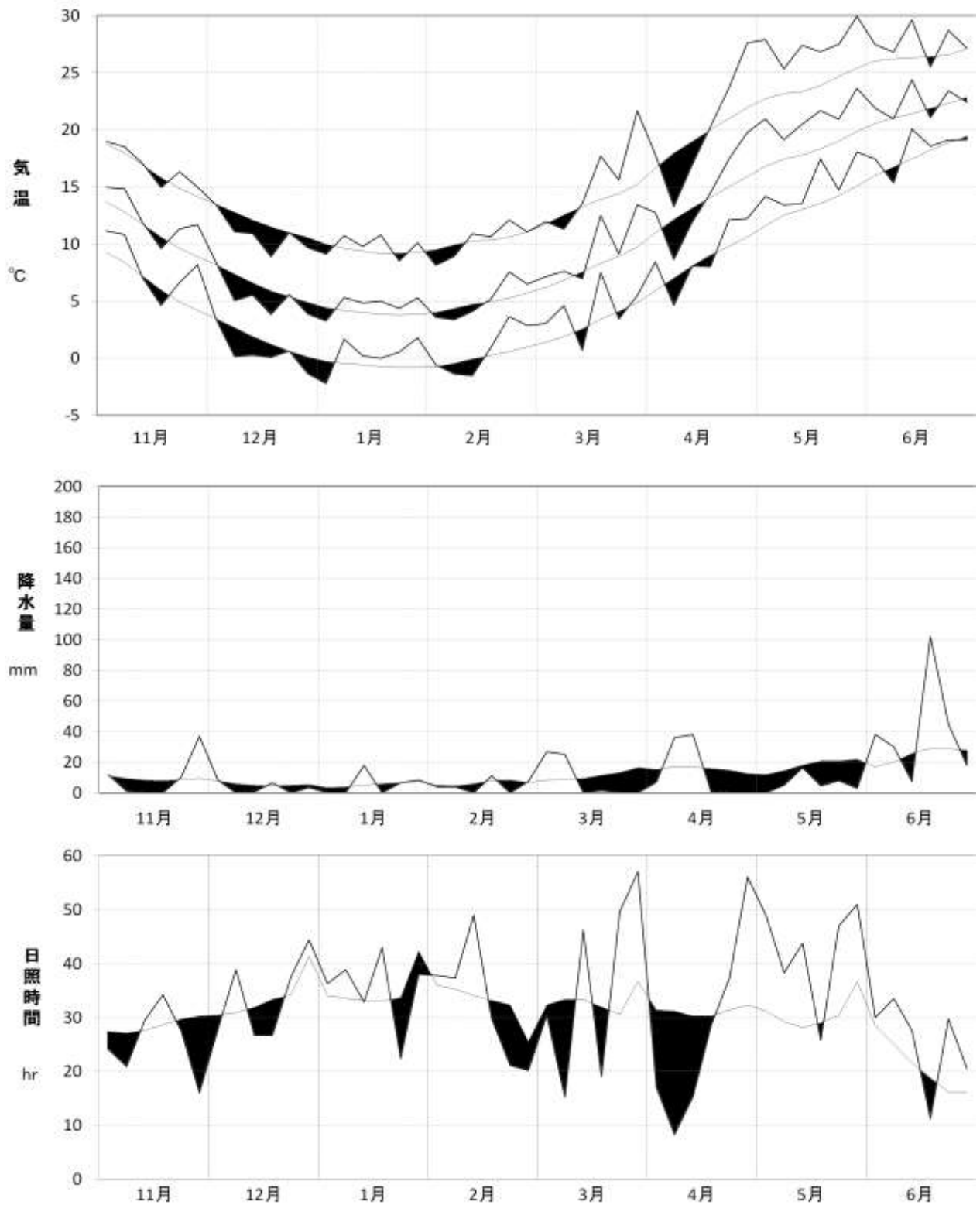


図1 生育経過



平成26年播(平成27年産)冬作期間気象図

(熊谷地方気象台日別データより作成)